

ポスドク研究者、大学院博士後期課程学生等国際学会派遣プログラム	
Dance Training as an Artistic Process: Through the Scope of Traditional Japanese Performing Arts	
氏名 原 みなみ	所属 比較文化学専攻
期間	2015 年 10 月 6 日～ 2015 年 10 月 11 日
学会・分科会名	National Dance Education Organization
場所	アメリカ合衆国・アリゾナ州
発表者名、発表形式	原 みなみ、口頭発表

1. 背景

クラシック・バレエをはじめとする舞踊の訓練は、「舞踊」という現象を研究していく上でも非常に重要な要素である。しかし、舞踊の訓練に関する研究は身体的要素や具体的な指導法、また従来の訓練法や指導法における問題点の指摘(Green 2002; Jackson 2005; Lakes 2005; Pickard 2013)は多く見られるが、舞踊の形式を習得する過程における、その教育的意義に関する研究は少ない。

2. 本発表の目的

今回、口頭発表を行った大会のテーマは“FOCUS ON DANCE EDUCATION: Engaging in the Artistic Processes: Creating, Performing, Responding, Connecting”というものであった。本発表では、特にテクニックや身体訓練が重視されるクラシック・バレエを例として、舞踊訓練の過程を芸術的成長過程(artistic process)として捉えることで舞踊訓練の教育的意義を考察することを目的とする。本発表は、芸術的成長過程の考察にあたり、クラシック・バレエ同様、形式化された「型」を習得する日本の伝統芸能における「型の稽古」と「守破離」の概念に着目することで、舞踊教育学と日本学を融合した学際的な内容となっている。先行研究(生田 1987; 西平 2009; 中澤 2014)やアンケート調査をふまえた上で、既存の「型」を習得し、そこから自らの「型」を生成する日本の伝統芸能の稽古における「守破離」の段階とダンサーの習熟過程の分析を行った結果、身体訓練にとどまらない、ひとりのダンサー、アーティスト、そして人間の成長過程として舞踊訓練の過程を捉えることが可能となった。日本の「守破離」のコンセプトを用いて舞踊訓練をひとりのダンサー、すなわちひとりの人間の成長過程として捉え直すことで、形式化された舞踊訓練における教育的意義の考察と再評価を行い、日本と欧米双方のコンセプトを組み込んだ新たな舞踊教育論の提示を試みる。

3. 当該分野での位置付け

本発表・研究は、「守破離」的習得プロセスによるダンサーの「まるごとの人間」としての成長を、バレエの訓練・稽古の過程を通して分析する舞踊教育研究である。舞踊ジャンルをバレエに限定した

のは、バレエにおける「型」、そして「守破離」的要素が他のジャンルよりも明確なためである。しかし、本研究で対象としている「守破離」的習得プロセスは、バレエのみならず舞踊全体にみられるものであり、その教育的意義や適切な指導法を考察することは、舞踊教育全体にとって有意義なものとなる。

前述のように、日本の伝統芸能の稽古について焦点を当てていることから、本発表・研究は舞踊学および舞踊教育学の領域を超えて、日本学にも通ずる学際的な視点を持つものである。日本に伝統的にある概念を扱うだけでなく、西洋のクラシック・バレエとの比較考察を行うことにより、日本文化や伝統の固有性が明らかになる。また、比較対象がクラシック・バレエであることから海外の研究者の関心も高く、日本文化の概念を発信することが可能となる。

4. 今回の学会発表・参加の意義

今回の学会発表は、アメリカの舞踊教育分野最大の学会、National Dance Education Organization (NDEO)で行った。NDEOは研究者のみならず、舞踊を専攻する学生や舞踊を教育機関やスタジオで教えている教師も数多く参加しており、舞踊教育の実践が重点的に扱われる学会である。そうした場で理論が中心となる筆者の研究発表を行うことは、参加者にとっては日頃の実践や自らの舞踊経験を理論と照らし合わせる機会になり、筆者にとっては理論を実践につながるアイディアを収穫できる非常に貴重な機会であった。舞踊教育分野の研究は、理論があってもそれを実践に還元できなければ研究としての価値がない。筆者は、研究において理論と実践の両方を追求することを目指しており、今回の学会参加と発表は大変意義のあるものであった。

筆者の口頭発表では、バレエ・ダンサーとなるための専門的な訓練を受け、著名なカンパニーでプロのダンサーとして活躍し、現在は大学の教員やパフォーミング・アーツの高等学校の教師をしている参加者らから、自らの実践や体験に基づいたバレエにおける「守破離」的習得プロセスに関するフィードバックを受けることができた。日本国内においてこうした経歴を持つ人物から研究の感想やフィードバックを受ける機会は稀であり、今回の発表で得られたコメントは現在執筆中の投稿論文や今後の研究の方向性を考えていく上でも非常に有益であった。

また、実践の報告や調査報告が多い学会であるため、他の発表から筆者の研究の実践部分につながる構想を得て、発表者とコネクションを築くことができたことも本学会に参加したことの大きな意義のひとつであった。

舞踊という分野は、学術分野としてはもちろん、他の芸術分野とも異なり、女性はマイノリティーではなく、多くの女性ダンサーまたダンス教師たちの活躍によって支えられてきた。そうした分野の国際学会に参加できたことは、女性のリーダーシップを目の当たりにする機会でもあり、将来日本の舞踊教育分野に携わる身としても非常に刺激のある経験であった。

参考文献

- 生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版、1988年。
西平直『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版、2009年。
中澤雄飛（2014）「芸道にみられる身体の学習論：身体の規律化とミメシスとしての模倣をめぐって」『体育・スポーツ哲学研究』36(2), 83-96.

- Green, J. 2002. "Foucault and the Training of Docile Bodies in Dance Education." *Arts and Learning*, 19 (1), 99-126. http://libres.uncg.edu/ir/uncg/f/J_Green_Foucault_2002.pdf
- Jackson, J. 2005. "My Dance and the Ideal Body: Looking at Ballet Practice from the Inside Out." *Research in Dance Education*, 6 (1-2), 25-40. doi: 10.1080/14617890500373089.
- Lakes, R. 2005. "The Messages Behind the Methods: The Authoritarian Pedagogical Legacy in Western Concert Dance Technique Training and Rehearsal." *Arts Education Policy Review* 106 (5), 3-18. doi:10.3200/AEPR.106.5.3-20
- Pickard, A. 2013. "Ballet Body Belief: Perceptions of an Ideal Ballet Body from Young Ballet Dancer." *Research in Dance Education* 14 (1), 3-19. doi: 10.1080/14647893.2012.712106

はら みなみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較文化学専攻

- ・ 英文タイトル : Dance Training as an Artistic Process: Through the Scope of Traditional Japanese Performing Arts
- ・ 英文氏名 : Minami Hara
- ・ 英文発表者名 : Minami Hara